運動部に所属する大学生のスポーツ傷害体験プロセスに関する質的研究
―アメリカンフットボールの場合―

D12-4010　野田 優子
指導教員　朝倉 隆司

キーワード：スポーツ傷害、アメリカンフットボール、傷害経験

１．緒言

心身ともに健康で文化的な生活を営む上でスポーツは不可欠であり、生涯の各時期で生活にスポーツを取り入れていくことが必至であるといえる。しかし、今日の競技スポーツ場面において、心身ともに何ら損傷なく健康的にスポーツ活動を行えているスポーツ選手は皆無に近い。このように、スポーツ傷害は生涯の各時期において人々が経験するものであるといえる。傷害経験はその後の選手生活において少なからず障害となり、身体面、精神面、社会面と、あらゆる面で困難を生じさせるだろう。しかし、選手生活を長期的視点で見ると、傷害経験は必ず乗り越えなければならないものでもある。

そこで、本研究は、スポーツ傷害受傷後に起きる心境や思考、行動の実態と、それらがどのようなプロセスを踏むのかを明らかにすることを目的とする。また、消極的に捉えられることの多い傷害経験をその後の選手生活に活用していくためのサポートの在り方についても検討していく。

２．方法

国立大学であるT大学の運動部に所属している学生6名を対象とし、2015年11月から12月にかけてインタビュー調査を実施した。インタビュー内容は、対象者の受傷歴、受傷後の心境・思考・行動とその変化、リハビリ期間中の周囲からのサポート、リハビリ期間中に実施していた行動のうち復帰後も継続している行動、復帰後の課題等である。録音データから逐語録を作成し、逐語録から概念を生成していった。生成された概念間の関係性を検討し、類似性に沿ってカテゴリーにまとめた。最終的に生成したカテゴリーを用いて運動部に所属する大学生のスポーツ傷害体験プロセスを描き、説明を行った。用いた研究方法は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach）である。

３．結果と考察

M-GTAによる分析から、16の概念と2つのカテゴリー、7つのサブカテゴリーを生成した。

＜受傷後に踏むプロセス＞においては、スポーツ傷害受傷によって、受傷前には見られなかった心境や思考が起き、それらが作用しながら様々な行動が起きていることが明らかとなった。そして、復帰に向けた行動がさらに新たな心境や思考を引き起こしていた。リハビリ期間中には、自らの行動の成果として様々な学びを得ており、これらの成果をまた復帰に向けた行動や復帰後の選手生活に生かしていた。また、受傷後に起きた心境や思考、行動には、周囲の人々によるサポートやチーム内での立ち位置や戦績等のチーム状況、既存知識が影響を及ぼしていることが明らかとなり、＜外部要因＞は＜受傷後に踏むプロセス＞に広く影響を及ぼしていると考えられた。

４．結論

スポーツ傷害受傷後にはプラスやマイナスの様々な心境や思考が起き、それらが影響を及ぼしながらその後の行動が起きていくというプロセスを踏むことが明らかとなった。そして、それらの行動からは選手としての姿勢や医学的・生理学的知識、技術等の学びを得て、それらの学びをリハビリや復帰後の選手生活に生かしていた。また、受傷後に踏むプロセスには周囲の人々からのサポート、チーム内での立ち位置や戦績等のチーム状況、既存知識が影響を及ぼしていた。以上のことから、傷害経験を選手生活に活用するためには、自らを高めようとする姿勢と周囲からのサポートが必要であるといえる。さらに、傷害経験が選手生活の質の向上に努めるようになる契機となり得ることが示唆された。